THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報　No.28　2008.11

目次

巻頭言　附属図書館の新たな出発のために　1

特集　第4回『言語力』大賞コンテスト　3

lead-off　本との出会いを楽しむ〈第2回〉　8

lead-off　図書館に関する話題〈第2回〉　9

学術講演会報告　11

本学教員等著作寄贈図書・資料一覧　12

附属図書館の新たな出発のために

附属図書館長　長谷川　成一

附属図書館長室には、旧制弘前高等学校図書室にあった木製の置物（写真参照）が据えられている。置物の樹皮の表面には、昭和 21 年（1946）頃に刻まれたと推定される文があり、それをここに紹介したい。

Amicus Plato, sed magis amica veritas

プラトンは（私にとって）親しき人ではあるが、しかし、真理はより一層親しき存在である

（アリストテレス『ニコマコス倫理学』第１巻第６章冒頭の「イデア論批判」の箇所の一節〈原文はギリシャ語〉を典拠にしたラテン語。人文学部の今井正浩教授のご教示による）

周知のように、終戦後、弘前市も県内他市と同様、物資の欠乏は極に達し、食料も満足に調達できない状態が続いていた。劣悪な環境にありながらも、真理を追究しようと勉学にいそしんだ旧制弘前高等学校生たちの燃えるような向学心を、我々は上記の文の中に汲み取ることができるのではなかろうか。ふり返ってみて、もの余りと飽食の時代にあって、彼ら高等学校生よりも遙かに恵まれた勉学の環境を享受しながら、果たして私たちは当時の彼らが刮目(かつもく)するような研究・教育の成果をあげているだろうか。自問しているこの頃である。

ところで、平成18年（2006）３月に策定した将来構想の中で、本学附属図書館のポリシーとして、「学生のための教育・研究支援を目指す」が掲げられている。本年４月、私が館長に就任した際に、上記のポリシーを十全に実現できているかどうかを検証する意味もあって、日頃、本館を大いに活用しておられる教員・院生の方々から、本館への不満・意見・要望などを寄せてもらった。その結果、いまでも改善の余地のある事柄が山積しているのではないかという認識にいたり、支援の内容をより一層充実させるため、全館員の協力を得て、次の４点にわたる主な事業を実施した。

１．　本年６月から本館の参考調査のセクションを昼休みの時間も開放して、学生・教職員の利用に供することにした。

２．　８月上旬、利用者の応対については、人文学部の森樹男准教授を講師として、館内でロールプレイングを伴う職員研修を実施し、利用者への対応の円滑化をはかった。

３．　10月から、文献複写と図書借用のWeb依頼を教員とともに学生も利用できるようにした。加えて、学外からも（自宅や出張先からも）アクセスできるように変更。

４．　11月17日から、本館と医学部分館・保健学科分室との間の図書貸出と返却に関するサービス（Webでの申し込みによる）を開始した。

以上に掲げたほかにも、種々改善点はあるが、特に掲げることはしない。本館では日々、館員が上記のポリシーに基づいて学生諸君の教育・研究の支援にいそしんでいるが、学生・院生諸君は果たして附属図書館をどれだけ活用しているだろうか。近年の傾向として、図書館利用者は毎年漸減状態が続いている。その原因は、電子ジャーナルの導入や、インターネットの利用によって、必ずしも図書や紙媒体に依拠しなくても研究がある程度まで進展させられるという現実があることも承知している。

しかし、我々はもう一度、冒頭に掲げた箴言(しんげん)をかみしめる必要があるのではなかろうか。真理を希求する精神が真摯であることこそが大事なのであり、そのステップとして、さらにはスプリングボードとして本館を大いに活用していただきたい。それが、本学附属図書館の新たな出発につながるに違いないと確信しているからである。

（はせがわ　せいいち）